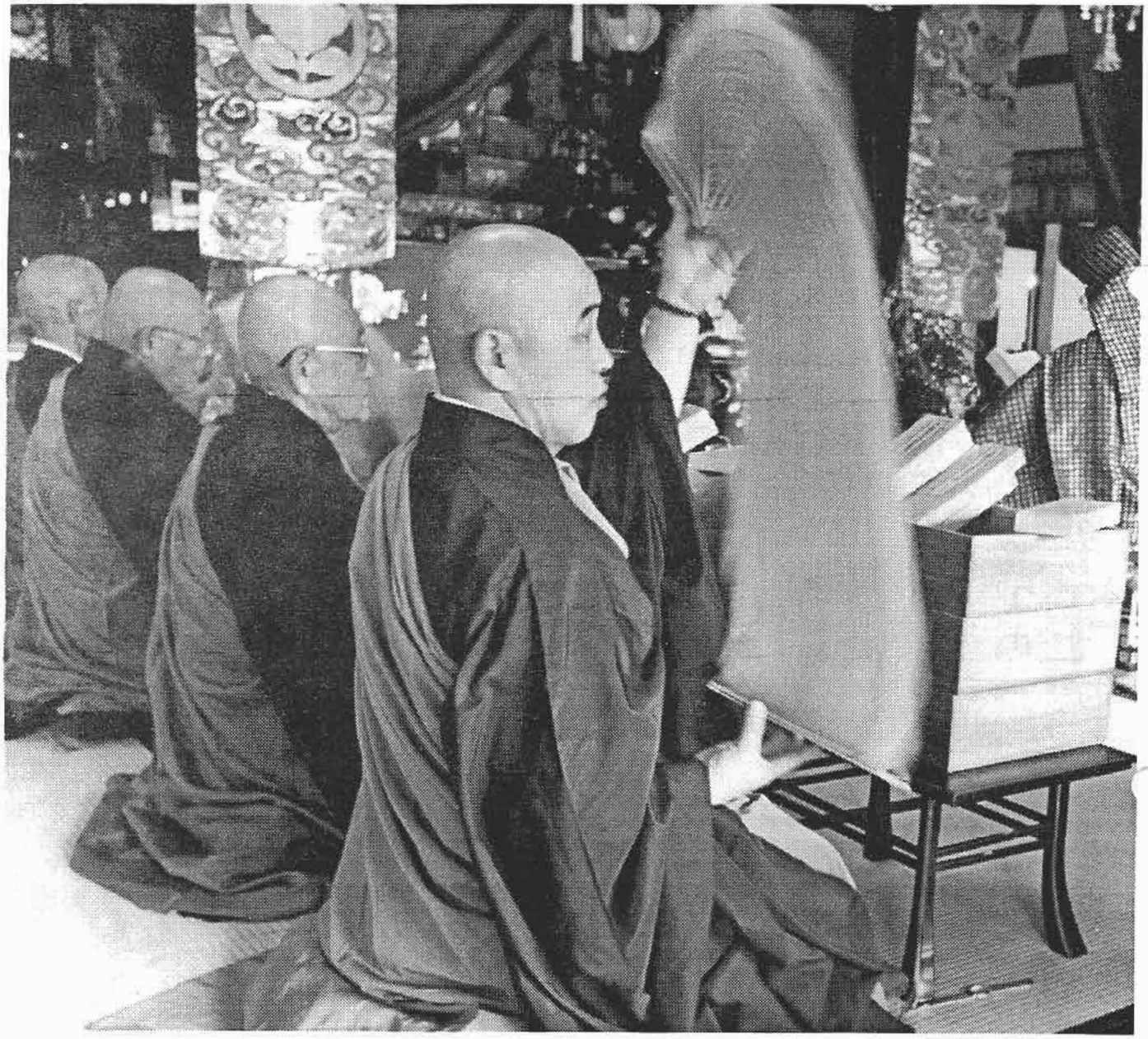
中川根ふる里通信

＝第60号＝

中川根ふる里通信
昭和61年4月20日創刊
編集・発行・連絡先
〒428-0313
静岡県榛原郡中川根町上長尾
TEL. 0547-56-0015　859-6
郵便振替口座 00870-4-81556



1月17日、上長尾の千葉山智満寺開山忌の法要が今年も盛大に行われました。お寺のお祭りとか「大般若（だいはんにゃ）」と古くから呼ばれて広い本堂は20余名の僧侶と檀徒に埋めつくされました。写真は大般若の行をしているところです。

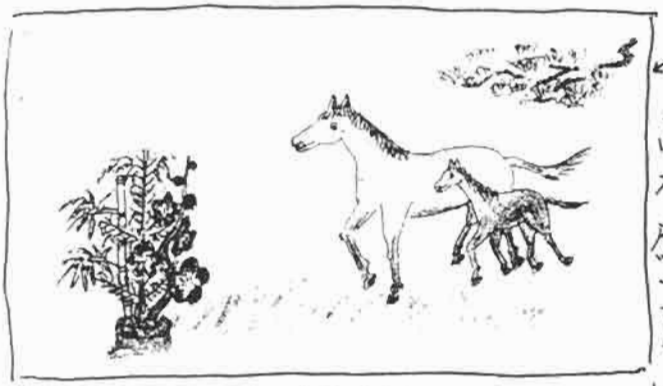
写真提供　諸田秀男さん（高郷）

賀

双馬遊鐔（江戸時代）

金谷町竹下四八七ノ二
近藤 睦さん 容子さん

澤本 等さん



中川根町藤川四〇一
高本鷹一さん

新年明けまして おめでとうございます

年賀状 ご披露させていただきます。
カラー版でお届け出来ないのが残念です。
インクジェット紙の賀状は ひときは色彩が引き立ちますね。

午 うま

浜北市内野1304-2
森の番人 宮田安清さん →

浜松市文丘町十八ノ二十三
横山利彦さん

八色刷りの木版画

ブラームスの雨の歌を
聴いていると
大井川の中流域 中川根町の
両岸の山々に降り注ぐ
湧き出る霧 雨の音
または
炭疽菌とか二十一世紀
それらのことを
一時忘れてしまう
拡張を続けている宇宙の
膨大なエネルギーの
次の標的
そんなことばかり
思ってしまう

焼津市山辺九八二の二
小川恵吉さん

迎春

ふる里川根は銘茶の産地　宝の美さは
日本で二番の白洲山上ホウオウスに天体
望遠鏡が設置された。午年にのやかて
ペガサスたのし　平成世紀への関心を
深めたい。

平成十四年元旦

〒420-08 静岡市東千代田三丁目二番二号　山田堀治さん

今年は午(馬)年です。午はエトで七番目、方角で南、時刻は昼の十二時です。

馬は哺乳類奇蹄目ウマ科の動物。利口で調教し易く、力もあり速いので、昔から農耕、軍用、輸送等に広く使役された。いま花形の馬は競馬のサラブレッド。隠語で馬肉を桜と云う。因みに鹿はモミジ、猪は牡丹。桜鍋、馬刺で一杯、たまらんですね。

どこの馬の骨かもの同士がウマが合い馬は馬連れ、生馬の目を抜く都で牛飲馬食。ウマい話にウマウマ乗せられ、馬齢を重ねた馬面の「馬には乗って見よ、人には添うてみよ。」との諺も馬の耳に念仏。ジャジャ馬の尻馬にのせられ、アテ馬にされたとヤジ馬に馬鹿にされ、馬印たて馬の背分けてと馬の鼻立て直したが、馬脚を露し、今更馬を牛にのりかえもできずか。あゝバカバカしい。

中川根町田野口361　長嶋　彰さん

春風に
闘志いだいて
岡に立つ(84歳)

本川根町千頭279(寸又峡)望月恒一さん

川根町家山一ロ三四の二　野島恵美子さん

私宅の東南には大井川をはさんで塩松山がゆったり横たわっています。塩松山は昔、塩郷の里から無双山銘の本城まで、塩の道が開けていたと言われます。塩松山には幾つかの谷川があって、中央のあたりにそうな沢という流れがあります。争の無い流れということです。近頃の暗い世の中にあって、争の無い明るい塩松山にのぼる初日に手を合せ平安を祈りました

中川根町瀬沢　原田耕作さん

今年は午歳・・・国事多難で経済は行詰り景気の好転もなく掛声ばかりで空虚・人品下落して険悪の世相・天変地異の兆ありとか

要注意

心して正常の世の中に戻さないと先が危い

中川根町上長尾一二五八ノ二　山田　茂部さん

ふるさと夜話第三十一話

思い出の智満寺
〃新茶の托鉢と年賀の青木葉納豆〃

原田耕作

茶園と言えば今では何処でも藪地一色にいろどられているが、昭和四十年頃迄の改植前、俗に在来種と言った茶園は昔からのやたら続きで、株張りが大小さまざま、茶葉の色も緑に濃淡あり、黄芽赤芽と千差萬別だった。八十八夜の別れ霜の心配が無くなってから川根地方の一番茶は始まった。

農家では昔から麦を常食にした。従って麦を盛んに栽培することは当然なことだった。麦は大麦小麦裸麦、早生から晩生までさまざまで一番茶を始める頃既に黄色く色づく麦もあったが、麦の収穫は一番茶が終る迄は手がつけられなかった。

麦が色づいて時鳥の声を聞く様になって智満寺の新茶の托鉢が始まるのだった。ホッチョウッチャッタカ、ホッチョウッチャッタカと聞こえる時鳥の声は、「お茶がこわくなるぞ、お茶がこわくなるぞ、早く摘め、早く摘め」と、茶摘みの女達をせかせる声だった。

現在では一番茶が片付いてから時鳥の声を聞く様になったが、これは茶の品種が早生種に変り、手摘みが機械刈りとなって短期間に茶時が終るたりで、時鳥のやって来る時期は少しも変っていないと思う。来日の時期に変りはないが、時鳥の鳴声の減ってしまったことは淋しい。時鳥が盛んに鳴いていた頃の智満寺の新茶の托鉢風景は、子供心にも立派だったと思う。

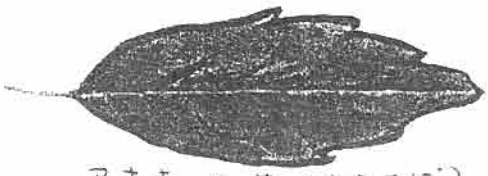
私の記憶にある托鉢風景は、和尚様が先頭に錫杖をつき従僧数人がこれにつづいた。和尚様は和尚様の衣装、従僧は網代笠に墨染めの衣、白の手甲脚絆、草鞋ばき、和尚様も手足の着装は同じ様だったと思う。檀家一軒一軒の表に立って読経する姿には頭が下る思いだった。

喜捨の新茶は読経中にお盆に一杯、寺の雇人の持った大海に入れたものだった。一日何軒の托鉢が出来たことだっただろう。随分疲れることだろうが、これも坊さんの修業の一つかと托鉢の一向の後姿に手を合せたことがある。

私の記憶にある当時の和尚様は、二十一世三上乎應と言う方で、二十年間智満寺在職、昭和十年、世を去られた。堂々たる体躯で見るからに立派な坊さんだった。茶園の緑と麦畑の黄金色とが織りなす村々を廻る托鉢の一団の姿は、初夏の川根の風物詩だった、と今更に思い出ふかいものがある。

二十二世釈野覚成和尚になって托鉢の様相に変りがあった。托鉢の坊さんの数も減らして和尚様共三人位になり、和尚様は錫杖もつかず従僧と変りない姿だった。墨染めの衣に網代笠、一見先代の托鉢とは違って一寸淋しさを感じたものだった。昭和の不況は寺の托鉢にも暗い影がさしたか、喜捨の茶の量にも影響があるのではないか、と思ったことがある。

昔の智満寺では年賀の挨拶として毎年青木の葉に包んだ納豆を檀家一戸に一包配る風習があった。青木とは俗におおきばと言われている木である、と言えば誰にもおわかりと思う。この風習はいつの時代から行われたか知っている人は無かった様である。青木葉の葉数枚を縦に並べて納豆を包んだもので、水分の無い固い金山寺味噌の香りがした納豆だった。多人数の家では食べた感じもしない程の量ではあったが、子供達にとってはたのしみの納豆だった。青木葉で包んだ納豆を、なお半紙で包んだもので、如何にも年頭のくださりもの、という感じがした。


アオキの葉（おおきば）

この青木葉納豆は智満寺手作りのもので、毎年お寺の近くの人達を多勢雇って納豆の仕込みから最後の檀家への配付まで行ったと、私宅の付近へ移住した上長尾生れの婦人の話だった。

しかし納豆の年頭配付の行事は、毛應和尚の代で廃止となって、次代の賢成和尚になって半紙一帖を年賀として下さるようになって、智満寺独特の青木葉納豆が消えたことは淋しかった。

その時代から今日まで何年が過ぎたことだろう。托鉢の姿も、青木葉納豆の香味も、記憶のある老人は、今の世に何人生きていることだろう。私は九十二歳になった現在、しみじみとした思いでペンをとった。

智満寺の昔を夢にでも見たいと思う。

編集室より

原田さんより『うっかり書いて三十一話になってしまいました。書き過ぎたと思います。ここらで止めたほうが良かろうと思います。いかがでしょう』との添え書きがありました。『毎回の寄稿を今後もお願いしたいと思いますが、ご無理な様でしたら一回おきでもいいですから、"ふるさと夜話"をふる里通信が終わるまで共に行かせていただきたいとお願いしたいと思います。

★59号4ページ下段13行目、当時の茶代金の一貫文（四KB）一千二百円位だったを一円二十銭だったに訂正させていただきます。ゆーわけありませんでした。

★前ページ大海（だいかい）について

煎茶入れで口が広く平丸型のものをいうと辞典にあり左図が載せられていました。このころの大海は紙袋ナビニール袋＋紙袋の三重の大きな袋になっており子供が一人は優に入るほどの大袋です。漢字も読み方も不思議なニュアンスをおぼえます。

★中川根町長選挙があります

二月十七日(日)に中川根町長選挙が行われます。中川根町の将来を左右する大切な選挙だと思います。町の代表者を選ぶ重大な役割を町民有権者は担っています。

昨年来より三人の候補者が立候補を表明しており静かな山村が熱気を帯びて、町内はもとより町外からも選挙の成行が注目視されているようです。

立候補予定者は（アイウエオ順）

◎上野虎徹さん　現町長　73歳　徳山地区

◎小林孟司さん　前助役　59歳　久保尾地区

◎杉山嘉英さん　前町会議員　46歳　壱町河内・文沢地区

です。それぞれに中川根町を、よりよい方向に導く為に、並々ならぬ決意をもっての立候補であろうと見受けられます。

町民の立場からしますと、三人が一同に会して各々の町政に臨む考えや熱い想いを公開討論会として主張する機会が是非ほしかったと思いました。紙面や書面での主張より迫力がありますし、三人の考え方の相違も見い出すこともお来る判ですから。

二月十二日以降は選挙戦に突入しますから、それぞれの主張も判りにくくなり、激しい選挙合戦になってしまうでしょう。それでも立候補者の中川根町への取り組みと正しい方向に導く施策を有権者の皆さんは聴きとり、熱い想いで投票する　とが、町民参加の町政の第一歩となると思います。

この四年間、中川根町においては町行政と町立法府の町議会とがしっくりいかず、町政も混乱する事もあった様に聞かれました。町民にとっては判断しにくい問題ではありますが、前回の町長選挙において、大多数の町議さんの推す候補者が落選するという、いわば、町民と議員と町行政の長とのねじれ現象がありました。昨年二月町議会議員の改選があり（無投票）この問題は解消された、とかも知れませんが、過疎に悩む我が町では、町行政と町立法との役割分担をしながら、なおかつ町民も参加して、町行政をスムーズに遂行出来る様に願っているのです。

現在中川根町においては、助役・収入役・教育長と三席が空席になっております。昨年十月末で退職され十二月末に他界されました鈴木康次前教育長・九月始め退職された小林前助役・収入役は数年前から空席といくら有能な事務方がいるとはいえ、決して正常な行政を遂行出来る状況ではないと思います。来たるべき選挙で町長が決まったら、町行政の体制を整え、難題山積の中川根町を強い力で引っぱっていってほしいと思います。

その為にも中川根町民は十七日の選挙には心眼を開いて町の明日を託す事が出来る町民の代表者〝町長〟を選ばなければならないと思います。そして中川根町は今、静岡県全体から選挙の成行を注目されているのです。もしかしたら、中川根町の名前も十年を待たずして消えてしまうかも知れません。その時の為にも、今度の選挙は大切な〝時〟と言えます。

五葉躑躅の咲く嶺々

十二月初旬、国民が待っていた皇太子ご夫妻にお子さまが誕生されました。とかく暗いニュースが多かった中、明るい光がさしたようで、とてもうれしい知らせでした。その命名も愛らしい愛子さま。健やかに育ってほしいと願っております。

少しして愛子さまのお印がゴヨウツツジとなったとのニュースが入ってまいりました。ゴヨウツツジと聞いて皆さんはどの様な植物を想像しますか？別名シロヤシオと言えば〝あ、そうなのか〟と納得されることでしょう。ふる里通信でも何回か紹介したことがありますし、封筒の絵柄にも書かれています。

五葉ツツジ、その名のように五つの葉に分れた一つの葉状になっていて特徴のある美しい葉の中に真白い清楚な花が咲きます。今回、昨年春撮った写真をプレゼント致します。

四月下旬大札山山頂付近に咲くアカヤシオ、五月下旬、蕎麦粒山を中心とした嶺線一帯に咲くシロヤシオと深山に咲く美しい花や樹木、草木が、いつまでも健やかに生きていられるように、心をくばりながら逢いに行く、そのような共生が出来たらうれしいと思います。

ツツジ科
ツツジ属
ゴヨウツツジ
別名　シロヤシオ
　　マツハダ

分布は中川根町では1,200m以上の高地に群生している。蕎麦粒山からの嶺線一帯には花が多い年には山が真白くなるほどの群生である。
別名のマツハダは幹がマツの木肌と似ている為である。
花が咲く時期は5月下旬、年によって1週間前後のずれがあるので、中川根町に連絡をとった方がよいと思います。

秋の風景が美しかったこと

昨年の秋は、久しぶりに〝秋〟を感じました。梅雨時に雨が降らなく、晴天が続いたことから、紫外線を多く浴びました。この事が、樹木にとって落葉時の紅葉、黄葉等を大変あざやかにしたという事を聞きました。奥山の木々も里山の木々も、草も庭木も、街路樹も〝こんなにきれいに色付いたのはしばらくぶりだなー〟と思えるほど、きれいでした。柿も栗もみかんもりんごもおいしかった。温暖化現象なのか、なかなか寒さが来ないため、十二月にも紅葉が見られていた。ここ数年でしたが、昨年は、色に見えて秋の深まり、秋の終りを感じられました。

寒さひとしお

十一月末には寒波が来ました。寒さになれていない体には、大寒の頃の寒さに感じられました。十二月に入って増々寒さはつのりました。十四日（赤穂浪士の討入の日）には初雪が降り、遠い元禄の時代を想いおこしたりしました。年末から正月にかけても日本列島大寒波となり、こちらも〝寒い寒い〟の連発でした。

一月七日を境に寒さが納まって、雨や曇のくり返しで、早くも早春の気配が感じられるこの頃です。ことしは春が早く来るのでしょうか。やはり昨年の旧暦閏四月のめぐってくる年は、気候不順が多いといいつたえは、まちがってなかったと思います。

『地名トンネルの想い出』

大村勝枝

〃泥が吐き出し
男の誠にや
女入れない
一寸先も
暗の闇を
ああ、ああ、涙を語れ　地名トンネル〃

暴れるヤマも
牙をたたむ
切羽の底で
わからない
砕いて越えた

削岩機の替え歌にして、夜勤明けの坑夫と一諸に風呂場で口ずさむ中興建設の掘削の親方有馬所長（平成十二年三月難病にて五十九歳で他界）。これは貫通真近の一コマでした。トンネルの貫通はものすごい感動で、作業所あげての〃喜びの声〃でありました。

平成四年七月十三日、地名トンネルの貫通式が、榛原郡中川根町地名の現地で行われ、県、地元、川根町、中川根町の工事関係者など約百人くらいの人が参加して行われました。何かつい昨日のように思いますが、もう十年近く前のことです。交通の最大のネックになっていた為、地元住民など待望のトンネルだったのです。取り合い道路の整備を含め、バイパスの完成は次の年の五月がめどでありました。

ここで概要を少し記してみますと、新しいトンネルは、全長三五八メートルで幅員は六メートル（片側一車線）、ナトム工法と呼ばれる現在主流のトンネル工事によって平成三年十月より掘削工事が進められていました。又この地名バイパス工事はトンネル付け替えを中心に全長一二八七メートルにわたり県道を改良するために昭和五十八年度から着手し、総事業費は十七億六千八百万円といわれました。

県道本川根―川根線地名バイパスは地域住民の生活道路として、また奥大井の主産業であります農林業の流通道路として又、観光用道路として重要な道路です。このような重要な道路のお仕事に私のような者が本川根町より（平成三年十一月～平成五年四月開通式まで）通勤する事ができたことは光栄であり、自分にとってやりがいのある活力に燃えた毎日でもありました。

私は㈱間組地名トンネル作業所横田所長より「川根町家山の林医院の隣に地主河徳様の広場があり、そこに宿舎が二棟建っています。その中にある下請の中興建設工業㈱の事務員をやっていただくよう社長の榎本様より頼まれておりますので行って下さい。」と言われ現地を案内されて行って見ますと、まだ大工さんの手を入れなければならない所ばかりで、ひとまず間組の事務所で、日報や新規入場者の名簿、健康診断書各種免許証の整理などを始めました。

「大村さんですね。」とヘルメットをかぶり　まっ黒で

中興建設工業(株)有馬所長(右端)

土くさいこわそうな人が私に声をかけた。「わしはこれから一ヶ月余り浜岡原発の四号機の放水路トンネル工事の残りの仕事が完成のめどがつくまで浜岡とかけもちで仕事をする。炊事婦のおばちゃんを一人残してあるよってにな――。これからわしの"片腕"になってもらわにゃあかんよ!!」と言われますます"こわい"と思いました。

それからがもう大変でした。そんな鹿児島出身の所長の下で、来る日も来る日も安全第一、休む暇もなく安全ミーティングが開かれ危険予知報告書や作業手順書、番割表の変更、進行表、書いても書いても次々あって、昼夜勤の一の方、二の方の日報処理、片づけとありとあらゆる生活の臭いがただよってくる現場作業所の事務員でした。

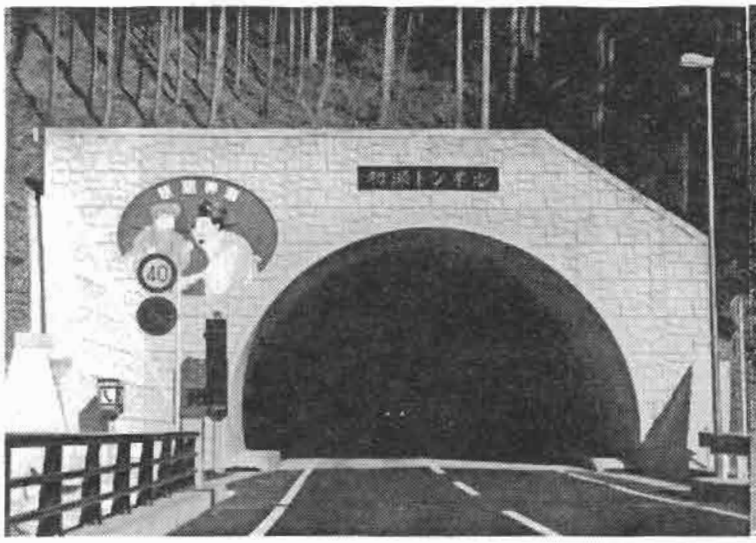
宿舎に多勢の抗夫が入って来るようになった頃には段取りも次第に覚え気持も楽になって参りました。現場も親方の所長も違うけど、以前同じ会社に勤務していた為かとりつき安かった。しかし北海道から九州まで広範囲の出嫁ぎの方々が多く、地方弁のわかりにくいのには苦労しました。

女は坑内には入れませんでしたが、事務員でも現場に立ち寄り出面らを調べ、支保工とロックボルトの数で、今日は一基か二基か進行状況が分かるようになりました。業社からくる工材もだいたいどこへ段取りしたらよいか、上司に伺い適材適所へ配達していくこと、これが手待分をふせぎ労力の無駄をはぶくこつだとも教えられました。最初はこわく見えた上司も根は優しい方々ばかりで、間組所長を始め、ラッキーメンバーだった。又、炊事のおば様三人が、ほんとうに陰になり陽になりしてカバーしてくれ良く気付かって下さいました。

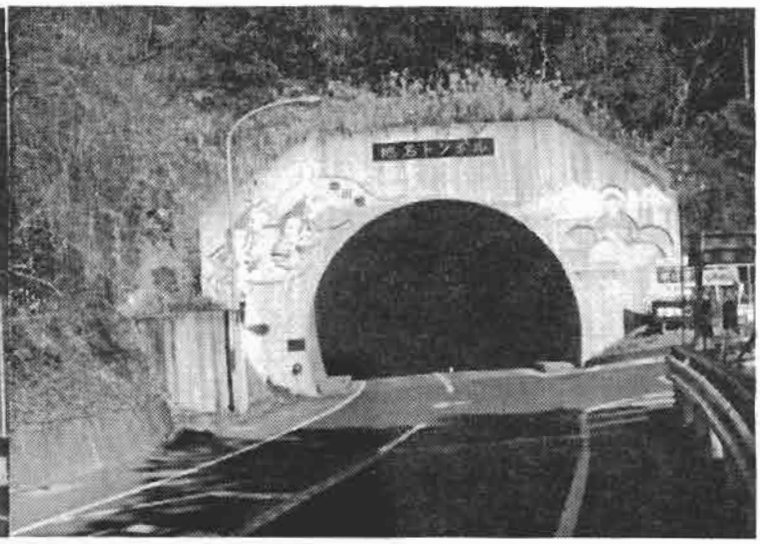
春には桜の下でお花見を開いたり、工事に一くぎりがつくたび焼肉大会をしたり、間組の職員や坑夫さん達も含めて、懇親会などもして楽しい想い出となりました。

トンネル工事は貫通すると終ったように活気も落ちますが、その後が大事です。セントル組やインバートの掘削、中央側溝、円形水路等覆工作業がなかなか長くかかりました。おかげと大した事故もなく遠い地方から家族と離れてきて下さった坑夫の方々、型枠大工の方とも楽しくふれ合うことが出来ましたのも近隣の業社の方々、地元住民の方々の御厚情があったからこそと深く感謝しております。又、家山の元間組静岡営業所の大島様にも大変な御指導をいただきました。

さて、この度、平成十三年九月二十九日に川根町と中川根町を結ぶ県道藤枝天竜線の初瀬バイパス(新初瀬橋二百十五メートルと初瀬トンネル四百二十メートルを合せた)が供用開始され開通式が行われました。交通渋滞が一気に解消され、地名バイパスについで三川根、南アルプスへの南北軸が完成しました。あの未改良区



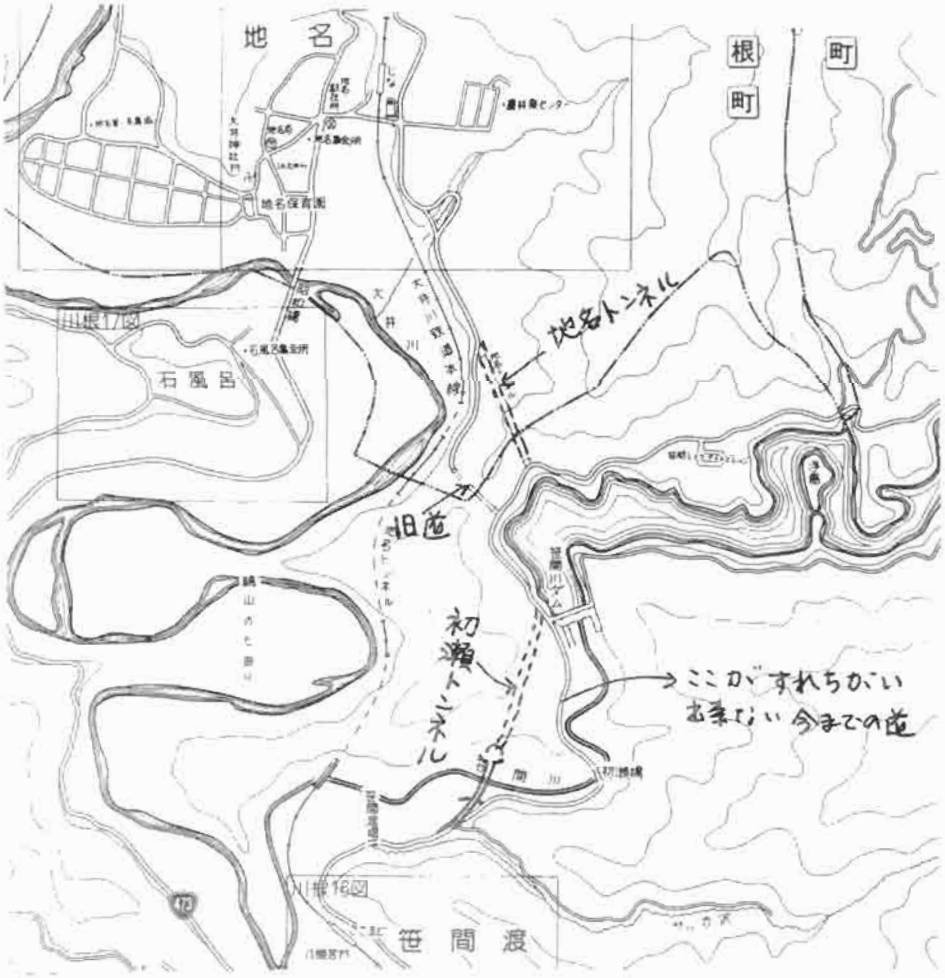
9月29日開通の新初瀬橋と初瀬トンネル



中川根町道路の表玄関　地名トンネル

間だった旧地名隊道を通っていた頃、又、笹間川ダムサイトを通り、すれちがい不能の道路、初瀬橋交互通行のルール、凍結箇所等々、思い出しますと現在はネックとなっていた渋滞もうそのように二車線をスムーズに車が流れて行きます。走りやすい道路は地域の活性化にもつながり、住民の進展に大いに役立ってゆくことでしょう。

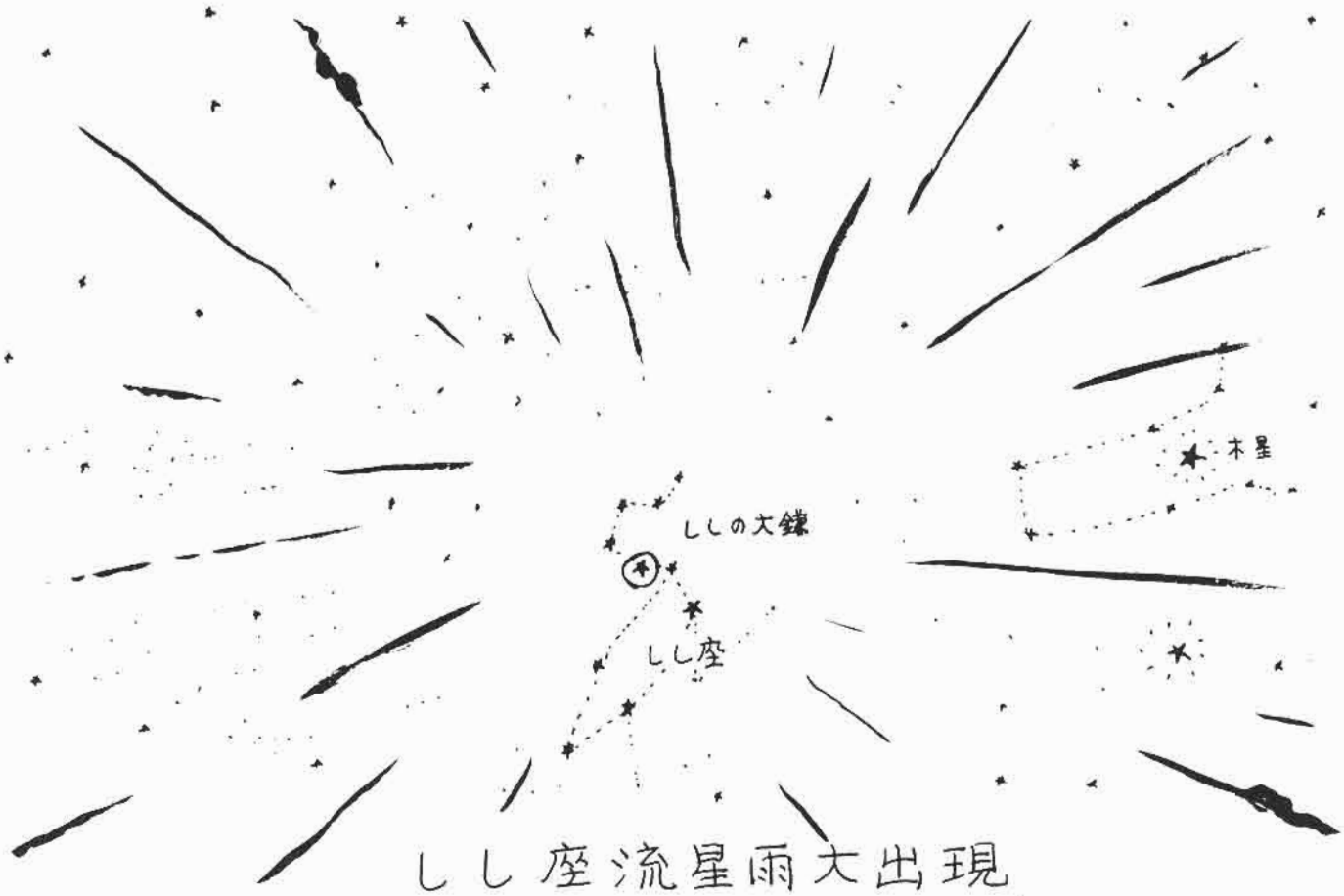
こうしたトンネルや橋梁工事が着手から完成に致るまでには、ものすごい人々の影の力が集まって出来上るものであって、一口にはとても言い表わせず、又文章にも書ききれるものではありません。



本当に多くの尊い人力の熱血が燃え、貢献された皆様の魂が切ざみ込まれて出来上ったということを私達は忘れてはならないと痛切に感じております。

―第二話　終―

次回もお楽しみに、赤石沢発電所工事などを予定しています。



しし座流星雨大出現

2001年11月19日2時～4時ごろ ピーク 3時10分ごろ

しし座流星雨の大出現、1833年、アメリカで見られた様子の木版画で、人々は世界が火事だと泣き叫んだ（星座天体観察図鑑より）

☆いつ流れるか予想のつかない流星や火球を見つけるのは根気のいるものですが、神秘とロマンがありますね。
星の流れるうちに願い事をすると叶うと云う・・・・秋は流星が多いようです。

☆流星群の場合は毎年出現期間が決まっているので、流星を見るのには、出現ピークに観るといいと思います。

☆流星群となって出現する流星たちは、彗星の軌道上に地球の公転軌道が交差するために、彗星のまきちらしたチリの中に突っ込んで たくさんの流星として見られるわけです。

☆流星雨は流星の数が多く雨の様に降りそそぐさまを云うのだそうです。（左絵の様なこと）

☆そして、11月19日、3時ごろ、それはそれは見事な流星雨を見る事が出来ました。1時間に5,000個くらいの流星の出現だったと云われていますが、予想を裏切らないすばらしい天体ショーをこの目で見ました。
ふる里は、時おり、薄雲がおしよせて来ては、晴れるという状態の空模様でしたが、充分観測出来ました。
しし座が天頂よりやや東にくっきりと浮び、ししの大鎌と呼ばれている☆星を中心に、流星が四方八方に飛びました。みなさんの所では、天気は良かったですか。
次回のしし座の流星群は たくさんのチリをまきちらす、テンペルタットル彗星の巡って来る33年後だとか・・・・

東京のかたすみから(三三)

テレビの始めから終りまで

中国人と私

渡邊實夫

私が最初に知り合った中国人(当時は支那人と言った)は、エイ・ショウハという少年で、六十数年前の昭和十二年の秋に上長尾小学校に入ってきた。顔色が青白く細身の小柄な子供で、私たち同級生の一年坊主はなぜか恥ずかしくて親しく話をしなかった。彼の家族は高郷の豆腐屋の隣家を借りて呉服屋をやっていた。彼の父親が呉服反物を背負って中尾(なかお)の私の家に行商に回って来ると、私は遠くから興味深く眺めたものだ。やがて支那事変が勃発すると間もなく、いつの間にか彼等は姿を消してしまった。

七年後の昭和十九年、私が掛川中学一年の夏の終りごろ、パラオ島(日本の委任統治領)から転入してきた中国人の生徒がいた。太平洋戦争の末期、敵(アメリカ軍)の攻撃が激しくなり、邦人と一緒に引上げてきて同級生になったものと思う。彼は上長尾小学校で一緒だったエイ・ショウハではないか、と思えるぐらい青白い顔で、やせた細身の柔和な感じがよく似ていた。彼は太平洋戦争で日本が敗色濃くなったころ、エイ・ショウハの時と同じように、なんの挨拶もなく掛川中学を去っていった。

その後十余年、太平洋戦争に破れた日本が復興して、テレビ黎明期を迎えたころ、浜松の工学部で二年先輩であったHBC北海道放送(当時新聞・放送で北海道王国を築きつつあった)の中津川弘幸さんが、札幌で実験に使ったカメラや送信機など、テレビ装置一式を持って中国へ商談を兼ねた指導に行った。その新聞(民間放送)記事を見て、いよいよあの『眠れる獅子』といわれた広大な大陸の中国が、国際舞台へ進出し発展飛躍をするだろうことを、私はこの時すでに予感した。

それから数年後、テレビ放送を始めようとする発展途上国の要人が、見学や勉強のためにテレビ朝日へ来るようになった。マレーシヤやパナマ、インドネシヤ、サウジアラビヤ、ベトナム、韓国など明るい楽天的な性格の外国人が多かった。

当時の首相田中角栄氏が、娘の真紀子さん(今の外務大臣)をつれて中国へ渡り、国交回復をはかった。続いて、テレビ朝日は日本の他のテレビ局に先駆けて、独自に中国と研修生交換協定を結んだ。中国からは放送運行や技術を習得のため、北京広播学院の若手の助教授と講師をテレビ朝日へ送り込んできた。テレビ朝日からはバーターとして中国語習得のため、年間社員一名を派遣させた。

私の部署へも中国の研修生が次から次と来るようになった。最初に一期生として趙炳旭(ちょうへいきょく)・陳善移(ちんぜんい)さんの二人が配属された。この二人が一組になって放送現場で実習した。出退社や勉強態度はきちんとしていて、謹厳実直であり、必ず二人で行動を共にした。知識欲は貪欲なまでに旺盛で、頭脳明晰・学術優等・品行方正・理解力もよかった。

テレビカメラ・回路・伝送・電波伝ぱん・衛星などの技術資料はなんでも欲しがり、捨てた物まで拾って持ち帰った。私は彼等の行動で一つだけ判らないことがあり、今もひっ掛かっていることがある。思い出しては中国親交家の

テレビ朝日のOBや現役に聞くがはっきりしない。

① 研修生が必ず二人で行動する。テレビ局へ出てくるのも帰るのも、実習中もいつも二人一緒である。

② その後、男一人女一人の二人で研修に来た時もあったが、職場では前期二人組と同じようにいつも一緒であった。しかし宿舎へ帰ってからどうしたかは知らない。

私は大変関心をもってながめ続けた。二人行動については、中国当局で義務づけ、お互いの言動を監視させ、中国の機密をペラペラ喋らせないようにするためかなと、勝手な推測をしたものだ。(写真は中国人研修生の趙さんと陳さん)

特派員や取材記者の報告記事を「テレビ朝日社報」で読み直してみたり、中国帰りの同僚や先輩の話を総合すると、当時の中国では、交渉ごとや打ち合わせ、契約などのときは、必ず二人以上の複数人を出席させ相互に監視させて、諜報防止や国家統制、人民管理を計ったことが考えられる。

もちろん、彼等の滞在中の住居や光熱、交通、電話代などの生活費はテレビ朝日が面倒をみたうえに、一人毎月十五万円を支給していた。シェンシェイ・シェンシェイ(先生先生)と言って親しく接してくると、私も悪い気持ちはせず、特に中国研修生には好感と親近感をもったものだ。

以上は二十年前のことであるが、最近の中国の若者は、随分と変ってきたように思う。

私は静岡大学工学部同窓会の結婚相談室をやっているが、留学生が持ち帰った同窓会誌の「結婚のしおり欄」を見たという中国青年から、日本女性を紹介して欲しい旨の手紙を受けとったことがあった。また、私の出身校の大学院に国費留学して、学位(工学博士)を取得した中国人女性が、たまたま我が家に遊びに来て、日本男性と結婚したいという話をしたことがあった。彼女は中国には自由がないから帰国したくない、と言って日本のメーカーに就職している。いずれも結婚相談に伴う話だが、彼等の明るい、こだわりのない、オープンな言動に接すると、以前の中国の若者とは比較にならないほど、自由・奔放に生きているなと感じる。

昨日十一月二十日、テレビ朝日人事部へ確認したら、前記の交換制度は以来二十年間続いており、テレビ朝日で学んだ四十人の研修生は、現在中国各地でテレビ指導者として活躍しているとのこと、このように地球規模での人間の交流が、『金』よりもなによりも世界平和へ貢献する最大の力ではないだろうか。

(二〇〇一年 十一月 二十日 記)

参考…上長尾の山本睦美さん、五和出身(金谷町)で元HBCの田塩富司さん、テレビ朝日の現役・先輩の皆さんにお世話になりました。

〝読書〟の想い出

静岡市　西田亨司

幸か不幸か、長い事本屋をしていると、お客様から〝読書三昧ができていいですね〟と云われることがあります。

昔は〝本が好きだから〟と云って本屋をやっておられた方があったようですが、今はそんな呑気なことを云っていたら自殺行為になってしまいます。それは、この商売は、情報網の中にたっぷりと浸って、その対応に忙しいことと、企画販売商品が後を断たないため、時間的余裕がないことです。

こんな今の私にも、ふる里中川根の徳山の小・中学生の頃、二つ読書の想い出が記憶として残っています。

一つは徳山小五・六年の受持であった地元の奈良間辰夫先生（確か後に中川根中学の校長先生をやられたと思う）が、読書の時間を授業に取り入れられたり、又、ある時は夜先生の家まで級友と押し掛けて、本を読んでいただいたこともあり、当時としては珍らしい事で、充実した学校生活でありました。

他の一つは、中学二年生頃、父が〝いい本だから読んで見るといいよ〟と渡された一冊の本、少年版「レ・ミゼラブル〝ああ無情〟」を読んだことです。中学生でもあり、記憶も鮮明なので、今回後者のことを、少し述べて見たいと思います。

レ・ミゼラブルはビクトル〝ユーゴー〟というフランスの十九世紀の文豪の代表作です。日本語訳は「ああ無情」と訳されていますが、皆様もご存知の通り、日仏語どちらも同じ位有名です。確か夏休みでしたので、昼間からゴロ寝をしながら一気に読み終えたことをよく憶えています。

小説の主人公ジャン〝バルジャンの一挙手一投足にすっかり魅了され読書後何時間かボーッとなりました。主人公の醸し出す恐怖感と正義感的な両極端の人間性に強く感動し、若気の至りでホロ酔い気分になってしまいました。

何回も脱獄を経験し、十九年も牢獄生活をした人間が、出所して冷めたい世相にさらされながらも、司教の救いの手がきっかけで、次第に持ち前の正義感の強い人間として本性を現わし、ついに、街の首長にまで上りつめていく有様は、悪人でも善人に成りうる、という人間の本性を追求した小説とも云えます。

特に、最後に内乱が勃発した時、ジャン〝バルジャンは市民派に加担して活躍すると共に、敵対する政府軍の警部は、ジャン〝バルジャンの正義感に打ち負けて逮捕するどころか、自ら身を投げてしまうのです。

即ち犯罪と貧困に苦しむ当時の世相を、より現実的に描写することで、愛と公平な社会を理想とする作者の意図を表現したのです。

さて作者ユーゴーは一八八五年に亡くなりましたが、その没百年の供養祭が、母国フランスで盛大に行われた、との記事を書店情報で知り、流石と思いました。この作品は世に出て百年以上たった今日でも、世界中の若者達の間で愛読され続けているそうです。日本語訳は一般向きとしては文庫版（全五巻で

計三、一〇七円(本体)が新潮社より出版されています。

最後にご参考迄に付記させていただきますが、最近の全国書店新聞によりますと、昨年八月に実施された家の光協会全国版農村読書調査(十六歳～六十九歳迄の約千人位が対象)では、一日の読書時間は平均で約二十分、一ヶ月の本代は千円弱となっています。さて皆様はどうでしょうか？

＊冬の夜祭は男女の出会の場？

12月15日～16日 春野町秋葉山の火祭

1月7日 久野脇 佐沢薬師大祭

赤々ともえ上るかがり火を囲んで ひよんどり を歌いながら肩を組み合って一晩中おどったという。意気のあったカップルは暗の中に消えたという。60年に一度の御開帳はあと十数年後とか。

＊神楽舞は土岐氏(一俗)の証し？

徳山神楽・笹間神楽・坂京神楽・清沢神楽
田代神楽・智者山神楽・梅津神楽・井川神楽
寸又神楽 …… かつてはもっと多くの地域で神楽舞が神に奉納されたという。

駿河北部(山岳部)一部遠州北部＝大井川、安倍川上流独特の神楽舞がある。婚姻、移住その他で多少の差はあるものの、神楽舞をしている(していた)地域は、土岐氏の本城支城などがあった所で、ギラという方言(話し方)をつかう人が多いという。特に徳山神楽は、きらびやかで美しいと思う。古い時代からの伝統が一本の綱で引きつがれている。

ふる里通信 → 通信販売のおしらせ

南アルプスが生んだ
おいしい水と米で作ったお酒
をどうぞ。

720mℓ2本入カートン(酔いくらべ)
運賃込み ¥3,200.－(消費税込)
おいしい酒粕プレゼント

〒426－0133
藤枝市宮原423－22－1
(株)志太泉酒造
TEL (054)639－0010
FAX (054)639－0777

← ご注文先

新年を迎えて早一月がすぎようとしています。昨年末に、お便りを発行します、と約束を致しましたが、やっぱり遅れてしまいました。ごめんなさい。歳の神様は生き物に平等に年を与えて下さいますから、重ねるたびに思考力も体力も反比例致しますから、その点も加味して、これからも頑張っていきたいと思います。どうぞよろしくお願い申し上げます。

ふる里通信も今回60号になりました。のんびり通信ですが、創刊号からの綴りもずい分厚くなりました。これも見て下さる皆様のお陰だと深くお礼申し上げます。これからもどうぞよろしくお導き下さい。

＊定期購読のお願い＊

中川根ふる里通信は有料発行です。

1部　テ共　200円

皆様の定期購読が、ふる里通信の発行を支えます。年間4回の発行（3ヶ月ごと）を予定しております。

今回で購読が切れる方と、始めてふる里通信をご覧になられる方には郵便振替用紙を同封致しますからこれからもご購読をよろしくお願いします。

もし、購読を止めたい時や、住所変更のおりも、是非ご連絡下さい。

郵便振替通知票番号
00870－4－81556
発行責任者　〒428－0313
静岡県榛原郡中川根町上長尾859－6
小沢節子
TEL　0547－56－0015
FAX　0547－56－0020

一月十七日は阪神大震災の発生した日、早くも七年の日が流れました。六千人を越す犠牲者を出し、都市機能を破滅した天災のエネルギーのすごさに改めて驚異する次第です。近い将来、必らず発生するだろう東海地震を思う時、何とも言えない恐怖におそわれるのですが、「備えあれば憂いなし」の諺を信じ、その時への心の準備もしなければなりませんね。もちろん、発生しない事を強く望みつつ。

一月十七日は、上長尾の千葉山智満寺のお祭、だいはんにゃの日でもあります。久しぶりにおまいりに行ってみました。美しく、ととのった本堂に、二十人ほどの和尚さんでくり広げられる儀式に、しばし見入りました。さすが智満寺とつくづく思いました。私の幼少の頃の十七日には、参道から境内に続く石段に露店がつらなり、菓子やおもちゃ、造花や達磨さん、いろいろな売り屋がありました。なかには、全国の産物をらくがんにした菓子屋があり、"さっぽろ人参、練馬の大根、甲州ぶどうに紀州のみかん…"などと歌いながら紙袋に入れて、ハイ二十円……甘くておいしかったと記憶しています。あの頃、子供は十七日が来るのを本当に楽しみにして、早く学校が終ればよいと勉強も気もそぞろで、お寺へかけつけたものだった。今は、子供一人いない境内になってしまって、何だか、とてもやるせない気になりました。

これから、ふる里は、春の前ぶれの梅花粉の舞う季節となります。今年はどうでしょうね。